



妥当な考えをつくりだす

加藤教諭「水に溶けるってどういうこと？～ものものわけ方～」のご授業は、「粒子的な見方」で妥当な考えを複数の結果から創り出すことをねらって本時を設定されました。導入において子供たちは、「蒸発・かさ・重さ・見た目」の複数の実験結果から考察することで、客観的に論理を創り出そうとしていました。先生が途中で顕微鏡チームの気づきを共有することで、食塩がどうなったかの考えがさらに深まっていく姿が見られました。まさに、「誰しものが納得いく法則」に向かっていく子供たち。その中で、研究協議では、論理的に説明する場面では文章だけでなく絵やイメージ図等も活用することでより粒子的な見方が深まったかもしれないという意見が出ました。また、個人の実験から焦点化して一人一人の気になること・不思議に思うことを突き詰めてから共有することで、さらに探究が加速する可能性も指摘されました。本時の問題が「水に溶けた食塩はどうなった」ということでしたが、「水の中に食塩はあるのか」ということに向かっていけると、より妥当性があがるのかもしれない。子供がこれまでの学びと結び付けて考える姿がたくさん見られた加藤教諭のご授業でしたので、今後、より粒子的な見方を働かせて妥当な考えを創り出すための探究の具体的な在り方もたくさん見えてまいりました。

1年生における「モーション」の可能性

運動（モーション）の概念に焦点化して題材を構成された森教諭。造形界限におけるモーションの概念自体がまだまだ研究途上である中で、1年生におけるモーションの可能性を切り拓いてくださいました。協議会では、発想・構想のきっかけとしてのモーションの在り方が議論されました。「滑らせて楽しい」から「滑る感じから何をつくろうかな」という思いが醸成された中で迎えた本時。「滑らせて遊ぶこと」以上に「つくること」に子供の意識が向かったのは必然なのかもしれません。その中で、環境と材について議論となりました。まず環境について、本時は「つくること」に重きを置いた環境設定でしたが、滑らせて遊ぶこととつくることの往還をねらうのであれば、より多様な見え方ができるように糸の長さや角度を変えた場にすることも意見と



して出されました。また、材ですが、様々なモーションの可能性を狙うのであれば、基底材のバリエーションも豊富なほうが良いというアイデアも出されました。今回森教諭は、発想・構想のきっかけとしてモーションを取り上げられましたが、題材においてモーションをどのように位置付けるかで子供の様子もまた違ったものになりそうです。